

国語

以下で引用している問題は、すべて2026年度前期入試の問題です。

例年の入試説明会で、国語科からお話しているのは以下のことです。

- 読解と表現との二本柱を立て、長文をじっくり読み通すこと、自らの考えを記述して答えることを重視しています。
- 小説の主人公の人物像や行動を読み取ることは、読者である私たちの生き方や経験にかかわっています。日頃から小説など数多くの文章を読む中で、人の心の動きや考え方について学ぶようにしてください。
- 漢字の書き取り問題： 残念ながら、字体が乱れ、読めない漢字を書く人がいます。とめ・はね・はらい・文字の形をきちんと意識して、ていねいに書く練習を^{おこた}怠らないでください。いいかげんな文字には点数を与えません。
- 選択肢問題： 内容読解の問題では、傍線部^{ぼうせんぶ}周辺の数行程度しか見ないで答えている人が多いようです。全文をしっかりと読み通すことが、どの問題を解く上でも基本になります。
- 記述問題： 読むことに十分な時間をかけて、ていねいに考えて書いてください。とくに^{かいとうらん}解答欄が大きい問題は、読み取って考えたことを、自分の言葉で存分に書いてほしいと思います。傍線部の前後の引用だけですませたり、自分勝手な思い込みでストーリーを作ったりしてはいけません。記述問題の配点は、全体の半分を超えることもあります。自分の言葉で書いて表すことをよく練習してください。それには、文章を自分の頭と心でしっかりと読み通すことが絶対必要なのです。

では具体的に、2026度の前期入試問題で上記の注意点を説明したいと思います。

2026年度の前期入試では、高橋三千綱（たかはし みちつな）の『野生』という小説から出題しました。小学生のみなさんには、あまりなじみのない作者の文章で、難しい言葉も多いかもしれませんが、少年の心理の変化を^{ていねい}丁寧^{ていねい}に追った作品です。文学作品を読み、自分とは違う生き方、考え方をしている登場人物について、その人の心理や行動、その人をとりまく環境を理解しようと努めることは、きっとみなさんの心を豊かにします。現実の人間関係を築く上の助けにもなるでしょう。古い文章や、難しい言葉づかいの作品も、敬遠することなく読んでみましょう。文学史上に残る名作と言われる作品を読むこともよいでしょう。古今を問わない幅広い読書経験を積むことで、優れた文章に多く触れ、豊かな感性をはぐくんでもらいたいと、本校の国語科では考えています。

設問では、本文の内容を正しく読み取る力、読み取った内容を文章として整理する力、そして、本文を理解した上で、自分の考えを述べる力を問いました。

本文の内容を正確に読み取るには、傍線部にある一つひとつの語句について正確に意味を理

解し、そこに描写されている心理や行動の根拠^{こんきよ}を本文中で探すことが必要です。指示語の指示内容や、たとえば何についてのもので、どのようなことのとえなのかを理解することも大切です。それらを読み取った上で、選択肢問題^{せんたくし}では、単に使われている語句だけに注目するのではなく、述べられている順番や因果関係が正しいかどうかまでよく考えて選ぶようにしましょう。記述問題でも、単に重要な語句を並べるだけでなく、意味が正確に伝わるかどうか、文章として整っているかにも気を配ることが大切です。できれば書いた後で見直しをして、言い足りないところや、文のねじれを訂正しましょう。

自分の考えを述べる時も、根拠がないと説得力のある論にはなりません。まずは本文を丁寧に読み、確実に言えることを、相手に伝わるように書くこと。その上に、自分の視点からの読みを加えることができれば、解答としてもよいものになりますし、みなさんの力を伸ばすことにもなるでしょう。

日頃の読書など文章を読むときには、内容や表現について「どういうことなんだろう」「なぜなんだろう」という疑問を持ちながら、それを自分の言葉で説明するという練習をしてほしいと思います。

ここでは、問十一を例に挙げて、説明したいと思います。

まずは設問をよく読みましょう。本文208行目の傍線部⑩「父親は喜んで食うにちがいないと思った」とありますが、問われているのは、「ここで和雄は父にどのような思いを抱いていますか」ということです。また、「父への気持ちの変化もふまえながら説明しなさい」と付け加えられていることも見落とせません。和雄の父への気持ちが、もとはどのようなものだったのか、何をきっかけに、どう変化したのかを書けばいいということが分かり、解答のだいたいの骨組みを作ることができます。

次に、傍線部⑩の前後、とくに前をよく読みましょう。傍線部の前には、「雀^{すずめ}が可哀^{かわい}そうだ」「とったからには丸焼きにして食ってやらなくちゃ、あいつらが可哀そうだ」とありますが、これは、河原で出会った男が捕^{つか}まえた雀を食べずに飼うということについての和雄の反感です。さらに本文をさかのぼると、和雄は河原で出会った男に対して、「手に入れた雀を、うまいまづいにかかわらず、誰の世話にもならず生きるためには食らいつかなくてはいけない男の果てしないたくましさ」（115～116行目）を感じ、「このおじさんは、おとうちゃんとぼくの二人合わせたぶんを、一人でやっているんだ」（117行目）と、その男の「たくましさ」を父も自分ももっていないと感じていたことが分かります。

また、本文のもっと前には、「五分歩くと父親は息切れをした。外に出られない父親の代わりに、自分はここで雀を獲^とっているのだと思った。」（85行目）「ほんとは、おとうちゃんがすれぱいばんいいんだよな。和雄は胸の内で呟^{つぶや}いた。狩りをしたものを子供たちに食わせる父親のたくましい男くささが和雄の脳裡^{のうり}を幻^{まぼろし}のように駆け抜けた」（86～87行目）とあり、たくましさの感じられない病気の父に対して和雄が不満をもっていることが書かれています。

ここまですを整理しましょう。

- ・和雄は病気で弱った父に物足りなさを感じていた

- ・だからこそ、父にない「たくましさ」の感じられる「男」にあこがれていた
- ・和雄は「男」が獲った雀を食べることを期待していた。（野生の雀を捕まえて食べるという行為は、「生きるため」の「たくましさ」ことの表れである。）
- ・「男」が雀を食べずに飼うと知ったことで、和雄は「男」に失望した。（実際の男は、和雄の期待するたくましい人間ではなかった）

ここまでが分かって、ようやく傍線部が理解できます。

「男」が食べない雀を「父親は喜んで食うにちがいない」と和雄が思うのは、決して根拠のない願望ではありません。本文75行目のあとの（中略）に、父が昔、雀を食べたことがあること、「うまかった」と語っていることが書かれています。今は病気であっても、父は本来「たくましい」人間であり、その父の本質は今の父にも変わらずにあるはずだと、和雄は父に期待するわけです。

- ・父は「雀を喜んで食うにちがいない」＝「生きるためのたくましさを持っているにちがいない」
- ・「男」への失望により、逆に「父」への期待が高まった。

以上、「・」に挙げた点を、時系列に沿ってまとめると、解答例ようになります。

様々な要素が入りますので、何がきっかけでどのような気持ちになったのか、その気持ちが次にどのような思いにつながったのか、「て・に・を・は」はもちろん、「が」「ため」といった接続部分にも注意して、大事な要素同士の関係が正確に伝わるように書きましょう。

ここまでの説明でお分かりのとおり、また、みなさんもいつも気を付けていることと思いますが、傍線部だけを見ても解答はできません。傍線部につながる要素を本文中に探すことが大切ですし、一つ見つかっても、まだ他にもあるはずだと考えて、さらに本文をよく読むことが大切です。

逆に、本文を読み直すことばかりに意識が向いていて、設問をいいかげんに読むと、何について、どのように答えることが求められているのかという、解答の骨組みに関わる大事なヒントを見落とすことになります。

最期に、自分で書く時の注意点として、もう一つ大切なことがあります。ここが大事な、と思った箇所をそのままだらだらと抜き出すのではなく、その中で本当に拾わなければならない言葉は何か、長い文章やあいまいな書き方であれば、もっと短い言葉や分かりやすい言葉で表現できないか、と考えてみてください。

正確に理解して、正確に相手に伝える。そのために何が必要か。難しいですが、日々の読書や、問題への取り組みの中で、常に意識しておいてほしいと思います。

正確な理解と表現のために、多くの言葉を知っていて、かつ書けるということはとても大切です。洛星では毎年、漢字の書き取りを出題しています。それは、受験生のみなさんに、次の二点を求めているからです。まずは多くの本を読み、多くの語句や言い回し、漢字を知ること。次

に、自分の書いた文字を見た人が読みやすいように、また、その内容を正しく読み取ることができるように丁寧に書くこと。

国語とは結局、相手を理解し、自分を相手に理解してもらうことです。

多くの本を読み、正確な理解に努め、色々なことを考え、相手を思いやって表現すること。皆さんが豊かな読書体験を重ねてこられることを洛星の国語科は期待していますし、洛星の問題が、みなさんの読書体験の一つとして、みなさんの力になれるように願っています。